



重い障害などで話すことが困難な人とのコミュニケーション方法の一つ「指筆談」を普及させようと、米子市を拠点に講習会を開く。参加者の中には、これまで知り得なかった当事者の思いが指先から伝わり、せきを切ったように涙する人もいる。天野依子代表は「意思決定支援は絶対に必要。どこでも行くので声をかけてほしい」と裾野拡大に向けて協力を求める。

指談とも呼ばれる指筆談は、わずかに動く指に介助者が自らの指先を当て、小さな動きを読み取る。最初は「はい」「〇」「いいえ」は「ㄣ」と2択で読み取ることから始め、訓練を重ねることで文字で「会話」できるよ

■ 84 □

「会話」普及させたい

指筆談の会ゆびやき

(米子市)

指筆談ができる障害のある人との体験会の様子



になる。

天野代表が指筆談を始めたきっかけは2013年、勤めていた福祉事業所で、重度の障害がある人が自傷行為したことだった。解決方法を探るため思いを知りたいが、会話ができない。悩んでいたこ

ろ、指筆談の存在を知り、第一人者の講演会に参加した。14年に団体を立ち上げ、15年から障害者やその家族らと練習会や講習会を開いた。今では、指筆談で進路を家族に伝えて決めた人や、けんかをする親子もいるほど。子どもがマヨネーズが好きだと信じて食事に出していたら、指筆談で嫌いだと知り、がくせんとした例もある。

同団体は鳥取県内の優れた地域づくり活動を表彰する「令和5年度令和新時代創造県民運動活動表彰」で協賛企業賞を受賞した。

天野代表は、指筆談で会話する家族について「みんな字の書き方を見ていて、理解している」と指摘。「教育現場でも普及すれば、障害のある子どもたちの可能性が広がる」と話し、県内での普及を急ぐ。